の姿勢がわかる。

このように、祐天は随身時代から大僧正時代まで決して庶民とのつながりを断ち切ることはしなかった。それが真の民衆の教化すなわち念仏の弘通につながっていったと考えられるのである。

### 第二項　鎌倉大仏の復興

伝記によると、南都大仏の勧進への協力とともに鎌倉大仏の復興を成し遂げたことが知られる。

鎌倉大佛師依因願修飾佛像営構石垣并寄附黄金数百両以永為修業之料

（『略記』）

師游方之時是亦有念佛堂造建之願故後［割注］伝通院住之時寄五百金」修飾佛像営石垣焉将移縁山之時有信士野嶋泰祐者［『下書』附欄外］野嶋氏者云美濃屋某者也有故被貶謫也」齎金千両来奉上師師不受曰我素願在鎌倉念佛堂子有信則為造立堂宇也野嶋喜諾大捨資財建念佛堂及方丈庫裡而始不断念佛也爾後野氏遇不祥而家断滅故無念佛修業之料於是師［割注］麻布住時」寄附黄金五百料以永為念佛之料也又某侯［割注］従四位侍従伊賀

（『実録清書』附）

牧松平忠周」［『下書』附欄外］時京所司代也」室［割注］光寿院」［『下書』附欄外］師龍土住時也」依二師勧誘一同寄二五百金一以備二其修復料一故于レ今無二退転一云
如レ此佛堂一以レ師称二中興開山一也

このように鎌倉の大仏は、祐天の発願によりさまざまな人々の浄財で復興されたことが記されている。

現在鎌倉の大仏の寺には大異山高徳院清浄泉寺と言う名前が付されている。この高徳院というのが野島泰祐の法名であり、野島氏の開基と言っても良い。現在でも正徳二年正月十二日と刻された灯篭が一対建っている。また、後世大正十四年九月二十日に野島家の子孫野島康三氏が大仏の前に香炉を寄贈している（銘より）。この野島家の家紋が九曜星で祐天の生家と同じなのも一つの縁であろうか。

『檀通書附』によれば、正徳二年正月十五日、灯篭の日付から三日後に鎌倉大仏常念仏が開白している。

また、この野島氏に祐天が金字の名号を施与している。この名号（いわき市九品寺蔵）の裏書きに、

高徳院法誉泰祐居士謂俗野嶋新九衛門尉
依為願望弥陀之法号一幅老師染筆之
常随沙門雲洞
宝永七庚寅年　秋

と記されており、ちょうど縁山に移るときに野島氏とかかわりを持ったことが裏付けられる。

ここに雲洞とあるのは、あとで述べるが縁山の宝松院主となる光誉雲洞と思われる。

玉山先生によれば（『THE祐天寺』六、五頁）、灯篭などを寄進したのちの正徳二年八月野島氏は天領であった鎌倉長谷村・坂ノ下村の田畠永別高四貫六百五十九文分と反銭三百十四文分の土地を寄進したとある。

さらに、祐天は隠退後の享保元年から二年にかけて五百両を当時の増上寺主白随や詮察らとともに寄進している（境内の石碑より）。

「正面」

観音仰施主増上寺演誉大僧正
南無阿弥陀仏

「右側面」

金五百両明蓮社大僧正顕誉祐天大和尚

金五百両光壽院殿明誉月清貞松大姉

（キリク）

金五拾両雄蓮社大僧正松誉詮察大和尚

金五両本山五十七主学誉上人冏鑑大和尚

「左側面」

増上寺演誉大僧正世話　山内所［　］

右者

享保元　丙丁

申酉　両年之〇御寄附

（キリク）

仰蓮社信誉上人法察和尚

金三拾両光安院殿浄屋泰漬大姉　正徳二年〇十二月十四日金拾五両春香院［　］

### 第三項　増上寺主としての祐天

『増上寺史料集』一を見ていくと、おもしろいことに気付く。それは、祐天の時代には定